

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：23902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370107

研究課題名(和文)近代日本における楽器産業の発展メカニズムと音楽文化 鈴木ヴァイオリンを中心に

研究課題名(英文)Musical Culture and the Growth Mechanism of the Musical Instrument Industry in Modern Japan: The Suzuki Violin Factory

研究代表者

井上 さつき (INOUE, Satsuki)

愛知県立芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：10184251

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦前の鈴木ヴァイオリンの発展メカニズムと音楽文化のかかわりを読み解き、さらに、国際的な文脈に置き直す試みである。創業者の鈴木政吉(1859-1944)はヴァイオリン製造を完全な独学でスタートし、日本の材料を使った楽器を量産して世界への輸出を試み、晩年には高級手工ヴァイオリンを作るようになった。こうして彼は近代日本の音楽文化を下支えしたのである。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify the growth mechanism of the Suzuki Violin Factory in prewar Japan as well as to put it in an international context. Entirely self-taught, the founder Masakichi Suzuki (1859-1944) sought to make instruments using Japanese materials, exported them widely across the world, and handmade violins of high standard in his later years. Thus, he supported the musical culture of modern Japan.

研究分野：音楽学

キーワード：鈴木政吉 ヴァイオリン 楽器産業 近代日本 音楽文化 グローバル 博覧会 国産

1. 研究開始当初の背景

明治20(1887)年前後に、ようやく国産化が緒に就いたオルガン、ピアノ、ヴァイオリン等の洋楽器の製造は、その後急速に発展し、日本の代表的な輸出産業となった。文化に根差した製品である楽器を、異なる文化をもつ国が取り入れることは当然困難を伴うが、日本ではそれが行われただけでなく、その楽器を量産し、諸外国に輸出するようになった。こうした事例は音楽史上、類を見ない。しかし、日本の近代音楽史研究において、洋楽器製造という視点はこれまでほとんど欠落していた。そこで、本研究を志した。

2. 研究の目的

本研究は、戦前に日本を代表する一大産業へと発展した洋楽器製造に着目し、鈴木ヴァイオリンを事例として、その発展メカニズムと音楽文化のかかわりを読み解き、さらに、国際的な文脈に置き直すことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の特色は、ヴァイオリン製造を、戦前日本の音楽文化の展開の中に位置付けると同時に、国際的な楽器製造の文脈にも位置付けようとする点にある。研究の方法としては、ヴァイオリンという洋楽器がどのように受容されていたかを、楽器製造、販売、輸出等のいわば「ハード」面に加え、ヴァイオリンがどのように使われたのかという「ソフト」面からも検討した。さらに、輸出先での日本製の楽器の評価や受容に関しても、日本と欧米双方の資料に基づき複眼的に研究した。

4. 研究成果

(1) 鈴木政吉の再評価

鈴木政吉(1859-1944)は明治20年代始めまで名古屋の東門前町で小さな三味線の店を開いていた。政吉の父、正春は尾張藩の下級武士で、内職として三味線を作っていたが、明治維新後はそれが本職となった。父の後を継いだ政吉は、明治20(1887)年に生れて初めてヴァイオリンを目にし、見よう見まねで翌年はじめに第1号を完成させ、ヴァイオリン製造へと身を転じた。そのわずか2年後、1890年に、政吉は上野で開かれた第3回内国勧業博覧会にヴァイオリンを初出品し、3等有功賞を獲得。1893年(明治26年)には、アメリカのシカゴ・コロンプス万国博覧会の楽器部門で入賞する。この後も、国内外の数々の博覧会で入賞した。

政吉は分業制によるヴァイオリンの工場生産をいち早く実現し、明治30年代には国内8割のシェアを持つようになった。ヴァイオリンが庶民の手に届く西洋楽器となるように、大量生産を始めたのである。その事業の展開のさせ方は、山葉寅楠(浜松の楽器メーカーであるヤマハの創業者)と似ているが、山葉の場合、アメリカの楽器産業がモデルに

なったのに対して、政吉にはそうしたモデルは存在しなかった。彼はヴァイオリンを大量生産するための方策を一人で考案し、多くの機械を自分で発明し、特許を取り、工場では動力を早い時期から導入した。

第一次世界大戦中、それまでの主要なヴァイオリンの輸出国であったドイツから輸入が出来なくなった国々は、極東の日本に楽器を求めた。鈴木ヴァイオリンの工場には世界中から注文が殺到し、好調な輸出に支えられて、鈴木政吉は事業を急激に拡大していった。大正末年、ベルリンにヴァイオリンの勉強に行っていた政吉の三男、鈴木鎮一がクレモナの古銘器グアルネリを持って一時帰国する。極度のインフレのために生活に困っていた婦人から買い取った楽器だった。政吉はこの楽器をモデルに、高級手工ヴァイオリンの製作に乗り出し、「ヴァイオリン作家」としてすぐれた手工楽器を作るようになった。

政吉は、そうして作った楽器をドイツやオーストリアへも輸出しようと考え、息子たちに楽器を持たせて、ベルリンやウィーンの演奏家のところに宣伝しに行かせた。その楽器について、たとえば、ヴァイオリン愛好家として知られた物理学者のアインシュタインが賞賛している。また、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターであったフランツ・マイレッカーやアルノルト・ロゼが推薦書を書いている。

大正10(1921)年前後には、1000人を超す従業員が毎日500本を量産し、年間10万本を輸出したこともあったが、大戦後は不景気と輸出の減少により人員削減を迫られた。そのような状況で、鈴木政吉は、追求する音色の方向性をクレモナのオールドヴァイオリンに定め、昭和19(1944)年に亡くなるまでヴァイオリン作りの研究を続けた。

明治期、ヴァイオリン製作にたずさわった和楽器職人はほかにもいたが、本格的なヴァイオリン製造へ移行できたのは、企業家精神の持ち主であった名古屋の鈴木政吉以外にはいなかった。その企業家精神と表裏一体をなしていたのが、政吉の「音」に対する並み外れた芸術的感性である。政吉は、工場経営者であると同時に、楽器職人であり続けた。「鳴り音」を追求する姿勢は生涯変わらなかった。彼が高級手工ヴァイオリンを作るようになるのは、後半生になってからだが、それが見事な作品であることは、1929年製のヴァイオリン(後述)が示している。だが、おそらく、量産品と芸術的手工品を両方作ったことが、後世の鈴木政吉の評価にとってマイナスになってしまったと考えられる。ピンからキリまである、おびただしい数の量産品につけられた鈴木政吉のラベルは、すぐれた手工ヴァイオリン製作者としての鈴木政吉の姿を覆い隠すことになった。

(2) 1929年製の名器発見

鈴木政吉の高級手工ヴァイオリンは楽器

博物館等に所蔵されておらず、歴史的価値しかないのか疑問であった。そこで、新聞のコラムで情報提供を呼びかけたところ、1929年製の楽器が愛知県で見つかった。尾張旭市在住の元小学校校長・松浦正義氏が父上から譲られたもので、氏はその楽器を愛知県立芸術大学に寄贈してくださった。楽器の修復後、2014年5月15日に、この楽器を使ったお披露目コンサートを愛知県立芸術大学室内楽ホールで開催した。この発見とコンサートは名古屋では大きな反響を呼んだ。それ以来、さまざまなコンサートでこのヴァイオリンを使っている。学内外での実演へのこだわりは、鈴木政吉が全くの独学で国際水準の楽器を作り上げるに至った、その事実を音そのもので多くの人々に体験してほしいからである。ヴァイオリニストによる「弾きこみ」により、音色はあでやかさを増し、箏や三味線等の和楽器の響きと見事に溶け合う一方、西洋音楽の演奏にも適していることが実証された。

(3) 新たな展開と今後の展望

この研究に関しては、さらに科学的な展開があった。奈良文化財研究所の主任研究員大河内隆之氏による鈴木ヴァイオリンの表板の年代産地調査である。年輪年代学者である氏は高解像度X線CT装置を使った研究により、量産品はもとより、愛知芸大の1929年製手工ヴァイオリンも北海道の天塩産アカエゾマツであることが判明した。現在、国産材を使用している弦楽器製作者は見当たらないが、かつて日本には豊かな森林資源があり、政吉はそれを使った楽器で世界に伍していた。

鈴木政吉作の手工ヴァイオリンをめぐっては、現在も新たな展開が生まれつつある。実際に楽器が見つかったことで得られた知見は予想以上に大きく、その楽器の存在が歴史の見直しをいざなっている。

幕末に生まれた鈴木政吉にとって、ヴァイオリンはまさしく「異文化」の楽器だった。自国の文化とは違う文化で生まれ育ったその楽器の製作を志し、研究に研究を重ね、日本製の楽器を携えて世界に打って出た政吉の功績を、私たちは伝えていかなければならない。それと同時に、いまや、鈴木政吉の生きた時代そのものが、私たちにとって「異文化」になっていることを理解しておく必要がある。洋楽器製造史研究は、日本の音楽文化全体の研究につながっていく。今後は、対象をピアノに移して、さらに研究を続けていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

井上さつき「日本のヴァイオリン王鈴木政吉」『ミクストミュージック』査読無、第12巻、2017、35-42頁

<http://id.nii.ac.jp/1235/00000570/>

井上さつき・畑野小百合「1920年代のベルリン高等音楽学校への鈴木ヴァイオリンの寄贈(その2)」『愛知県立芸術大学紀要』査読無、第45巻、2015年、115-126頁

井上さつき・畑野小百合「1920年代のベルリン高等音楽学校への鈴木ヴァイオリンの寄贈(その1)」『愛知県立芸術大学紀要』査読無、第44巻、2014年、139-151頁

<http://id.nii.ac.jp/1235/00000495/>

〔学会発表〕(計3件)

井上さつき「書評と展望 鈴木ヴァイオリンと博覧会」日文研共同研究会「万国博覧会と人間の歴史」2017年2月25日、国際日本文化センター(京都市西京区)

井上さつき「政吉ヴァイオリンがニュースになるとき」藝術学関連学会連合第11回公開シンポジウム、2016年6月11日、早稲田大学戸山キャンパス(東京都新宿区)

井上さつき「名古屋が生んだヴァイオリン王鈴木政吉と近代酵素学の創立者レオノール・ミハエリス 知られざる出会い」第16回酵素応用シンポジウム、2015年6月12日、天野エンザイム(株)慈善堂ホール(岐阜県各務原市)

〔図書〕(計1件)

井上さつき、中央公論新社『日本のヴァイオリン王 鈴木政吉の生涯と幻の楽器』、2014、368頁

〔その他〕

○データベース作成：大正期『名古屋新聞』音楽記事データベース

当初、鈴木政吉と鈴木ヴァイオリンに関する資料を集めるために「鈴木政吉プロジェクト(井上さつき代表)」を立ち上げたが、新聞紙面を1ページずつ見ていく地道な作業の成果を広く役立てていただきたいと考え、音楽記事全体を収集していく方針に切り替え、データベース化した。2013年に愛知県立芸術大学図書館のHPを通じて「試作版」を公開、2017年リニューアルし、音楽記事全体を扱う検索機能付きのデータベースとして完成させた。このプロジェクトについては、平成25年度愛知県立芸術大学学長研究費、および、平成26年度愛銀教育文化財団の助成を受けた。

http://aigei-library.blogspot.jp/p/kiji_sakuin.html

○レクチャーコンサートと講演(主なもの)

井上さつき(講演)「名古屋が生んだヴァイオリン王 鈴木政吉の生涯」〔演奏つき〕愛知学院大学第132回モーニングセミナー、2017年3月14日、愛知学院大学楠元学舎110周年記念講堂 共演：牧野葵(vn.)

<http://www.agu-web.jp/~seminar/index.php?ID=126&cID=2>

井上さつき(お話・構成)「幻の政吉ヴァイオリンでたどる名古屋の知られざる音楽史 明治 大正 昭和前期 第4回 物理学者アインシュタインとヴァイオリン」スイーツタイムコンサート、2016年11月15日、宗次ホール(名古屋)共演:桐山建志(vn.) 江頭摩耶(vn.) 江川智沙穂(pf.)

井上さつき(お話・構成)「幻の政吉ヴァイオリンでたどる名古屋の知られざる音楽史 明治 大正 昭和前期 第3回 鈴木政吉と鈴木鎮一 親子の絆」スイーツタイムコンサート、2016年5月18日、宗次ホール(名古屋)共演:桐山建志(vn.) 江川智沙穂(pf.)

井上さつき(お話・構成)「幻の政吉ヴァイオリンでたどる名古屋の知られざる音楽史 明治 大正 昭和前期 第2回 ヴァイオリンで邦楽曲 明治大正の音楽会」スイーツタイムコンサート、2015年11月20日、宗次ホール(名古屋)共演:江頭摩耶(vn.) 野村峰山(尺八)野村祐子(箏)戸谷誠子(pf.)

井上さつき(お話・構成)「奇跡のヴァイオリン いのちつないで」社会福祉法人愛知いのちの電話協会創立30周年記念チャリティーコンサート、2015年11月15日、共演:小堀勝啓(朗読)江頭摩耶(vn.) 戸谷誠子(pf.)

井上さつき(講演)「名古屋の生んだヴァイオリン王 鈴木政吉」名古屋キワニスクラブ、2015年10月2日、名古屋国際ホテル

井上さつき(お話・構成)「幻の政吉ヴァイオリンでたどる名古屋の知られざる音楽史 明治 大正 昭和前期 第1回 名古屋市公会堂が新しかった頃の名演奏家たちのコンサート」スイーツタイムコンサート、2015年5月15日、宗次ホール(名古屋)共演:桐山建志(vn.) 江川智沙穂(pf.)

井上さつき(お話・構成)「名古屋の生んだヴァイオリン王 鈴木政吉」2014 やっとかめまちかど寺子屋(名古屋やっとかめ文化祭) 2014年11月20日、メニコンHITOMIホール、共演:江頭摩耶(vn.) 國枝由莉(pf.)

井上さつき(公開講座)「ちょっと知らないヴァイオリンの話 第2回 近代日本のヴァイオリン製作と鈴木政吉」2014年後期 岩倉市生涯学習講座、2014年10月31日、岩倉市生涯学習センター

井上さつき(お話・構成)「戦災と伊勢湾台風をくぐり抜け、今、よみがえる幻のヴァイオリンの音色～日本のヴァイオリン王 鈴木政吉の物語」スイーツタイムコンサート、2014年6月3日、宗次ホール(名古屋)共演:小堀勝啓(朗読)江頭摩耶(vn.) 戸谷誠子(pf.)

井上さつき(講演・構成)「日本のヴァイオリン王 鈴木政吉の幻の名器をめぐる」愛知県立芸術大学音楽学部音楽学コース主催、特別講座(レクチャーコンサート) 2014年5月10日、愛知県立芸術大学室内楽ホール、共演:松浦正義(ヴァイオリン寄贈者)

松下敏幸(ヴァイオリン製作)、江頭摩耶(vn.) 戸谷誠子(pf.)

○新聞への寄稿記事

井上さつき「100年前の名器に心意気 幻の政吉ヴァイオリンを求めて」朝日新聞名古屋本社、2016年12月8日、地域総合愛知全県版

井上さつき「幻の政吉ヴァイオリンをめぐる」北海道新聞夕刊、2016年2月5日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 さつき (INOUE, Satsuki)
愛知県立芸術大学・音楽学部・教授
研究者番号: 10184251

(4) 研究協力者

松下 敏幸 (MATSUSHITA, Toshiyuki)
ヴァイオリン製作家

桐山 建志 (KIRIYAMA, Takeshi)
愛知県立芸術大学・音楽学部・准教授
研究者番号: 40521167

大河内隆之 (OKOCHI, Takayuki)
奈良文化財研究所・主任研究員
研究者番号: 50372181